「こころ」読書メモ

　大正３年（1914 年）４月から８月　朝日新聞　110 回連載
９月には半自主出版の形で刊行されたが、漱石が序文を書き、表紙のデザインも自分でしている。
　語り手の「私」は地方出身の青年で、明治が終わる少し前に大学を卒業。高等学校時代に鎌倉の海水浴場で一人の紳士と知り合い、それ以後「先生」と呼んで私淑している。先生は定職を持たず、勇んで生活しているようだ。「私」は先生の家を訪問するようになるが、先生の内面と過去は謎に満ちている。

　漱石が年来抱いていた「自分が自分でありながら、自分の主人公ではない」という不安が、この作品での主題である。自分本位を保とうとしても、いざというときに自分が自分でないものによって圧倒されてしまい、一層苦しいところに追い込まれてしまう。「先生」は「多くの善人がいざという場合に、突然に悪人となるのだから油断ならない」と言っているが、信頼している叔父に遺産の問題で裏切られる。
　自分だけは大丈夫と思っていたが、恋愛の問題では嫉妬と我に支配されてしまう自分を知る。他人を呪い嫌っていた自分が、今度は自分自身を呪い嫌うことになってしまう。
　その苦しみに悩みぬいた末、今度は自分自身の犠牲者として殉じてしまう。
　愛と不信とを同時にもつという矛盾に苦しむ知識人の姿を的確にとらえているこの作品は、若い読者に深い感銘を与えた。

　単行本化に際し、連載時の全１１０章を上・中・下に３分割し、それぞれ「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」に再構成した。
　上・中の語り手が青年の「私」。下は「先生」が自らを語り、かつて友人から恋人を奪ったこと、そしてその罪悪感に長く苛まれていることが明らかにされる。
　明治の「青年期」を終えた日本人の、倫理感とエゴを鋭く追及した内容であり、漱石文学の到達点といわれる傑作である。

「子悪」と「礼」　荀子
モチーフ：　光と影　　――＞　　内面化
　　（先生と私）　　（遺書）
明治 43 年　夏から 2 年間　大正元年 9 月（過去完了）
明治天皇の崩御

（先生と私）
第一の出会い：明治 43 年夏、鎌倉の海

第二の出会い：先生の秘密、東京、雑司が谷の墓地　先生の友人Ｋの墓がある。
ある晩、信用しない、信用できない、近寄ってはいけない。
先生の過去判明：卒論準備―＞郊外散歩―＞つつじ
財産整理問題から、善人―＞悪人になる、人間不信
「人、親戚に欺かれたのです。死ぬまで忘れない、復習する」
明治 45 年秋、卒業、故郷に帰る、晩餐会、また 9 月に暗い表現に
（両親と私）天皇崩御、東京を想像、先生からの遺書が届く
（先生と遺書）暗い人生――＞参考にしてください。
裕福な学生、
Ｋの告白、Ｋへの罵倒（精神的に向上心のないものは馬鹿だ）、策略、
覚悟・影
Ｋの自殺
妻への思い
明治の終わり
自殺

こころ

学生の「私」は、鎌倉の由比ガ浜で出会った男に「先生」と呼びかけたことで、親しく交流するようになる。

その交流を通じて、人生の教訓を得たいと思ったからだ。やがて私は先生夫妻の人柄に惹かれながらも、その謎めいた過去を知りたいと願うようになる。

先生は時が来たときに秘密を明かすことを約束した。大学を卒業した「私」は、病床の父の側にいるべく故郷で一夏を過ごすが、思いがけず「先生」からの長い手紙が届く。

危篤の父を故郷に残して東京行きの汽車に飛び乗った。

そこには、学生時代の「先生」が、現在の妻である女性を巡って、親友との間に巻き起こした恋愛事件の顛末が告白されていた。

「自由と独立と己とに充ちた現代」に生きる近代人の悲劇を描いた漱石の代表作。

こころ　　中　　両親と私　十六、十七、十八より

実家へ戻り、病気の父親の枕元に座している「私」のもとへ先生から手紙が届く。罪を告白する例の分厚い手紙である。しかし木徳を迎えつつある父親の傍らで手紙をじっくり読む暇はない。だが、期になって、ちらりと開いて目に入った頁に先生の自死の予告。八となった私は、危篤の父親を見捨て、東京行きの汽車に飛び乗る。そうして車中で先生の告白を読むのだ。この場面のサスペンスの盛り上げ方は、「エンタテイメント作家」そうせきの面目躍如というところだ。

ストーリー

「先生と私」

鎌倉の海岸で「先生」と知り合った語り手「私」は、先生のお宅をしばしば訪問するようになりました。先生は毎月一回、必ず一人で友人の墓をお参りしていました。先生と友人との間に何があったのか先生は語ろうとしませんでした。先生は「恋は罪悪ですよ」と言い、其の時期が来たら、先生の暗い過去をすべて話してくれると、私に約束します。

「両親と私」

「私」は大学を卒業した後、いったん故郷に帰ります。就職のために東京に戻ろうとするのですが、病気の父が危篤状態に陥ります。母が私の就職がまだ決まっていないことを心配し、先生に世話をしてもらうように私に勧めます。私は先生に手紙を書くのですが、一週間たっても返事は来ませんでした。

いよいよ父の最期の瞬間が来たと覚悟したとき、先生から分厚い手紙が届きます。私はその手紙を手にしながら、東京行きの汽車に飛び乗りました。

「先生と遺書」

両親を亡くした「先生」は信頼していた叔父に財産を横領され、人間不信に陥っていました。その後東京に戻り、新しい下宿先を探します。その下宿には軍人の.未亡人と一人の娘がいたのですが、先生はそのお嬢さんにだんだん心が惹かれていきます。

一方、先生の親友Ｋは養親を欺き、実家から勘当されます。Ｋの事を心配した先生は彼を自分の下宿屋に連れて行きます。Ｋは親切な奥さんとお嬢さんのおかげで次第に明るくなっていったのですが、彼がお嬢さんと親密になるにつれ、先生は嫉妬に苦しむことになります。ある時、Ｋの口からお嬢さんに対する切ない感情を打ち明けられ、先生は「先を越されたな」と思います。先生はお嬢さんへの慕情に苦しむＫに向かって、「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、かつてＫ自身が吐いた言葉を投げつけ、恋のゆくてを遮ろうとします。

動揺した先生はＫを出し抜いて、お嬢さんとの結婚を決めてしまったのです。そのことを知ったＫは何も言わずに、自殺してしまいます。その後、先生は何事もなかったようにお嬢さんと結婚するのですが、その結婚生活は索漠としたものでした。結局、先生は乃木大将殉死の知らせを聞いて、明治の精神に殉死するとして、自殺していったのです。

作品の面白さ

私はその人を「先生」と呼んだのですが、先生は親の財産で働く必要のない生活を送っている。いわゆる高等遊民であって、教師という職業に就いているわけではありません。

私は先生に惹かれ、その先生から何か人生の大切なものを学ぼうと思っているから、先生と呼んだのです。

若くして両親を亡くし、一人になった先生は叔父を頼り、全財産の管理を託して東京で学生生活を送っていました。休みに帰郷すると、叔父は自分の娘と結婚するように勧めだしたのです。叔父は既に財産をごまかして、そのために策略で娘を押し付けようとしていたのです。

そういった経験から、最初は下宿屋の奥さんも財産目当てに自分の娘を押し付けようとしているのではないかと、警戒していたのです。「先生と遺書」で、先生は、こう語って行きます。

しかし、その一方で次第にお嬢さんに惹かれる気持ちが強くなっていくのはどうしようもないことでした。

先生はお嬢さんに対して、「信仰に近い愛」だと告白しているのですが、まだ二人の関係は淡いもので、お互いの気持ちを確かめることも無かったのです。

それがＫの出現によって、二人の関係が大きく変化します。

Ｋは自分が信じる道の為にあらゆる犠牲を厭わない、強い意志をもった人物でした。

だから、Ｋを医者にしようとしていた義父母を欺いて、仕送りを受取り続けていました。

そのことが義父母に知られて、仕送りを止められ、しかも、実の両親からも勘当を言い渡されます。まさにＫは天涯孤独の境遇となってしまったのです。そういったＫを見るに見かねて、先生はＫを自分の下宿に連れてきたのです。

先生の下宿に住み始めたＫは最初、下宿屋の奥さんやお嬢さんにぶっきらぼうだったのですが、次第に二人と打ち解け始めます。それは先生が本来臨んだことだったのですが、Ｋとお嬢さんが親しげにするのを見るにつれ、先生の心が徐々に穏やかでは亡くなります。

ある時、先生がいつもより遅く下宿に帰ったとき、Ｋの部屋からお嬢さんの声が聞こえてきたのです。

先生は叔父に財産を横領されたこともあり、お嬢さんに若干の警戒心を抱いていたため、それと特に焦ってお嬢さんとの深い関係を結ぶ必要がなかったため、今まで、特にお嬢さんに積極的に出ることはなかったのですが、Ｋが出現することによって、先生のお嬢さんに対する見方が変わったのです。

この段階ではＫの気持ちも、お嬢さんの気持ちもまったくわかりません。しかし、この些細な出来事から、Ｋとお嬢さんとの様子に無関心ではいられなくなるのです。

そして、突然のＫの告白です。

「精進」という言葉を普段から使い、己を厳しく律して生きてきたＫにとって、自分が人を好きになるなんて思ってもみなかったことなのです。実は「精進」という言葉には禁欲の意味も含まれていたのです。

かつてＫは「向上心のないものは馬鹿だ」と先生に言い切りました。それなのにお嬢さんを好きになってしまったのです。お嬢さんのことが頭から離れることが出来ません。まさに向上心のない馬鹿は自分で、そのことで一番苦しんでいるのはＫ自身だったのです。

もちろんこの時点でＫはお嬢さんに自分の気持ちを打ち分けようとか、前に進もうと思っていたわけではありません。苦しくて、苦しくて、もっとも信用している先生に告白したい衝動に駆られただけなのです。

しかし、先生は「先を越されたな」と思ったのです。

先生はＫの恋の行く手を遮ろうとするように、Ｋに無言の圧力をかけたのです。

ここで注視しなければならないのは、Ｋ自身は自分の気持ちをどう整理するのかで頭がいっぱいで、先生が密かにお嬢さんを愛していたなどおもってもいなかったことです。そして、先生もＫに対して自分の本心を打ち明けることはしませんでした。

先生はＫと表面上親友を装っていながら、心では敵対していたし、Ｋは先生がどんな気持ちでいるのか、想像さえしていませんでした。逆に言うと、Ｋはそれほど先生を信用していたのかもしれません。

やがて先生は仮病を使って、奥さんと二人きりになる機会を作りました。

まさに普通の人間が突然悪い人間に変わったのです。先生がかつて「私」に「突然悪人になるのだから油断してはいけない」といったのは、財産を横領した叔父のこともあり、そして、自分自身のことでもあったのです。

何も知らない奥さんがお嬢さんの結婚のことをＫに告げ、「あなたも喜んでください」といったとき、Ｋは「おめでとうございます」と言い、さらに「何かお祝いを上げたいが、私には金がないから上げることが出来ません。」と付け加えたのです。

そしてＫは自殺します。

ここがポイント

先生はなぜ自殺したのでしょうか？

若いころ、Ｋを裏切ってお嬢さんと結婚し、そのためＫが自殺してしまったので、良心の呵責に耐えかねて自殺したと思われがちです。

本当にそうでしょうか？
作品の中には次のように書かれています

ここで告白されているのは、Ｋを裏切った良心の呵責ではありません。先生は、もし殉死するなら、明治天皇にではなく、明治の精神に殉死すると告げているのです。
では、明治の精神とは何か？
先生は遺書の中に次のように続けています。

乃木希典大将は若い時西南戦争で隊旗を取られ、申し訳なく切腹しようとしました。
しかし、それならその命を天皇の為に仕えと、人に諭され、死のう死のうと思いながら三五年間生き続け、天皇の葬式の夜、殉死したのです。
先生は乃木大将の三五年の孤独な人生と、自分のそれとを重ね、明治も終わり、乃木大将も殉死したのだからと、自殺を決心したというのです。
では、Ｋの自殺以後の先生の人生はどのようなものだったのでしょうか？。
まずはＫが何故自殺したのかを考えていく。
もちろん信頼している友の裏切り、失恋の痛手、それも十分自殺の動機にはなりますが、果たしてそれだけでしょうか？
まずＫの遺書を読んでみましょう。

Ｋは何一つ語らず、死んでいったのです。
いや何一つ語れなかったのでしょう。それは、お嬢さんの名前だけ遺書にないことでもわかります。自殺の理由としてＫが書いているのは、「自分は薄志弱行で到底先の望みがないから、自殺する」という言葉だけです。
先生には遺書の最後の言葉が引っかかりました。
「もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろう」
先生は最後の言葉を読んで、Ｋはきっと寂しかったのだろう、と思ったのです。

お嬢さんとの失恋、先生の裏切り、そのどれをとってもＫには耐えきれないほど苦しいことだったのに違いありません。
しかし、Ｋは自分に厳しい生き方をしてきたのです。信じる道のためにあらゆる執着を断ち切らなければならない。それなのにお嬢さんを好きになってしまったのです。人は自分の気持ちをコントロールすることなどできません。それは仕方のないことだったのでした。
そこでＫは立った一人信頼している先生に救いを求めたのです。
ところが、先生は「向上心のないものは馬鹿だ」という、かつてＫ自身の言葉を投げ返しました。Ｋはそれに対して弁解はできません。馬鹿なのは自分の方なのです。

その時、Kは言葉にならないほどの寂しさを感じていたはずです。
　Kは自分自身に厳しく、それと同時に他人にも厳しかったのです。それは自分を孤独に追いやることにほかなりませんでした。Kは故郷を棄て、家族を棄て、養父母まで棄てました。それでも精進と言って、歯を食いしばって生きてきたのです。
　お嬢さんの結婚話を奥さんから聞かされた時、Kはそれが全く予期していないことだっただけに、心にぽっかり穴が開いたような感じがしたのです。そして、その穴はとても埋めようのないものでした。
　Kは、相談相手の先生が密かにお嬢さんを愛していたなんて、夢にも思っていませんでした。隣同士の部屋で暮らしながら、相手の心を全く理解していなかったのです。そして、この世で一番愛していた人の心もわかっていなかった。
　その時、Kはこの世でたった一人ぼっちだと自覚したのではないでしょうか。一度愛を知ったKは、もはや元の孤独を耐え抜く自信を無くしてしまったのです。
　だから、遺書の最後に「もっと早くしぬべきだのに何故今までいきていたのだろう」と書き残したのです。遺書のほとんどが本音を隠した事務的な内容であったのですが、この最後のとこだけがKの本心だったのでしょう。
　それは「彼岸過迄」の須永の「淋しいです。世の中にたった一人立っているような気がします」という信条につながるものなのです。
　だから、Kは壁一枚隔てて眠っている先生の隣の部屋で、何も言わずに一人で死んでいったのです。

ではなぜ先生は自殺したのでしょうか？
　遺書を読んだ先生は「私は私にとってどんなつらい文句がその中に書き列ねてあるだろうかと予想したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかしれないという恐怖があったのです。私は一寸目を通しただけで、まず助かったと思いました」とあります。まずKのことではなく、自分の立場を思いやったのです。

　ここでは両親の呵責など、全く語られません。あるのは、自己保身の気持ちだけです。
　そして、Kがお嬢さんを好きだったことを誰にも打ち明けず、何食わぬ顔でお嬢さんと結婚したのです。その後、奥さん、お嬢さんとの三人の生活が始まるのですが、先生はKの思い出となる過去を封印しなければならなくなりました。愛しているお嬢さんにも自分の本当の気持ちを隠し党さなければならないのです。
　やがて奥さんが死に、先生はお嬢さんと二人だけの暮らしを始めます。その時、徐々にKが先生の胸の中で蘇ってきたのです。

先生はいつの間にかKの生きてきた人生を辿っていたのです。「私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中に立った一人で住んでいるような気のしたこともよくありました」まさに先生はKの孤独を引き受けてしまっていたのです。

先生は、寂しくて、寂しくて、この世で立った一人生きてきました。
死にたい、死にたいと思いながらも、自分が死んだ後の奥さんのことを思うと、死ぬに死ねなかったのです。
その時、先生は、「もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」というKの言葉にいつの間にか支配されていたのです。
そんな時、乃木大将の報せを聞いた先生は、「乃木さんはこの３５年の間、死のう死のうと思って、死ぬ機会を待っていたらしいのです。私はそういう人にとって、生きていた３５年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました」と、乃木大将の人生と自分のそれとを重ねたのです。
そして、「明治の精神」に殉死しようと、自殺を決意したのです。

こころを読みなおす　―病と人間―
短編を積み重ねる　先生と遺書を
上、先生と私　　中、両親と私　　下、先生の遺書

海水浴場と雑司ヶ谷霊園
・夏休みを鎌倉で過ごす→友達からの誘い、しかし友人は母の病気を理由に実家に帰る
・海水浴場→英国シーバーシング→医療効果、徴兵制と結びつく兵士訓練（スイム）←西南戦争、コレラ菌　、オランダ疫病対策、脚気　→　関西から大森、鎌倉海水浴場へ　→近代化と医療対応、
・先生との出会い→海水浴の西洋人と先生　→　先生と私　東京に戻って、→　雑司ヶ谷墓地での出会い
・墓地通いの分けへ

明治天皇の病気
先生の意識変化、告白
両親の死　腸チフス、母に感染

「病と人間」
父親の病　腎臓の病　先生の奥さんの親も同様

病と不自然な暴力の死
卒業論文、→　６月卒業、→　散歩　→　親の財産の処分と忠告
親戚に欺かれる、→　屈辱と損害、→　人間を抜くむ様になった
先生の過去を尋ねる
秘密を話しましょう！。先生は、人を信用して死にたい。適当な時期に

私は、故郷に帰る
奥さん静と先生の会話、死に対する悲哀
尿毒症（糖尿病→腎臓病の症状の変化）

故郷での卒業祝い
明治天皇の病気の報知、と父親の病気
　糖尿病→腎臓病の症状の変化
明治天皇崩御、１０日後乃木希典の殉死　９月 13 日

父親の危篤

先生からの電報　９月 14 日
　来られるか？　に対し、いけない、では委細手紙で
再、電報　９月 16, 7 日ごろ、来るに及ばない

そして、先生は長い手紙にしたため　→　遺書

父親の危篤を差し置いて上京へ
　下の 56 章　死の決断
　乃木希典の死から 2～3 日後　９月 15 日～17 日決心

　先生の両親と腸チフス
　日本のコロナ対策
　先生の生きた時代、戦争と感染症の時代
　父親の看護
　母の遺言？　東京へ、とは？
　親戚の対応　→　ごまかされた財産管理
　学生が東京へ出るということ
　中学→東京へ出る→高等学校へ入る→帝国大学に進む
（文化大学、理科大学、法科大学、医科大学）

帰省して　財産の始末
実家に叔父夫婦　→　娘との縁談話
財産の措置（叔父にごまかされた)、→　疑い、処分　→　心持の変化
友人に頼み、売却→相続　金銭化　→　預金・公債、利子生活者へ　→　勉学者として生きる（利子の半分で暮らせた）　→　小石川へ下宿を探しへ（軍人の家族を紹介される）
（明治民法施行前（３１年前）仏→独
砲兵工廠　武器工場
伝通院
大學

心の時代背景
日清戦争（94-95）→　多額の賠償金　→　日露戦争（04-05）→　三国干渉　臥薪嘗胆
（朝鮮支配）　（南下政策）　（軍需産業）
旧民法による帝国主義的資本主義体制へ
遺産相続による財産取得
相続トラブル　→　現金化　→　利子生活
伝通院、小石川下宿（軍人家族、厩のある
市ヶ谷→小石川の小さな家へ
奥さん（軍人未亡人)、お嬢さん（娘)、
下女（手伝い）
私、(学生)
そして、K（幼な友人）が加わる

「精神的向上という病」
鷹揚な対応　下 14 章　→　ダブルバインド　15 章～18 章　どちらかに決めたい
引き裂かれた思い　女を見くびる、→　愛へ（肉から愛へ）→　宗教心に近い
先生の愛をめぐる意味　恋は罪悪ですよ
・心　→　恋愛と愛情、女
→　感染症（ペスト）→、近代化と感染症対策
漱石自身、幼いころ種痘にり患、あばた顔、トラウマ、伝染病に対する差別

心のキーワード　→　恋愛現象
恋　→　関係を恋する、憧れる
愛　→　関係を愛でる、寿ぐ、親しみ
ＬＯＶＥ　→　翻訳語　近代の恋愛観　←　恋は、恋する憧れ
愛は、キリスト教等、宗教的

→Kとのトラブル（19 章～23 章　Kを下宿へ住まわす、25 章奥さん、お嬢さんに協力請う）　→　30 章（82）　房総旅行、向上心のない奴は馬鹿だ（Kの言）　→ 32 章Kの告白、36 章Kの自白（お嬢さんへの思い）　41 章策する（向上心のない奴は馬鹿だ→Kの言を繰り返す）　→　　Kの自殺、真相究明　→　雑司ヶ谷墓地へ
その後、先生は
→　心の変化　→　不安　→　学問　→（　生活の　　）→　心のたるみ、→明治天皇の崩御　→　乃木大将の殉死　明治の終わり　→　先生の自殺決心　→　遺書　→　私へ宛て　→　病気の父を置いて上京　→

まとめ
-鎌倉湾　安全→太平洋、引き潮満ち潮、怒涛　→　明治天皇の葬儀、秋台風，轢死者多数、未亡人に対する差別、そして時代、疫病への反抗の気持ち、→

朗読　こころ　メモ
file:///C:/Users/S-KAWANO/Downloads/%E6%9C%97%E8%AA%AD%E3%81%93%E3%81%93%E3%82%8D.pdf